

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02417

研究課題名(和文) 秋田県の探究型授業を生かして主体的・対話的で深い学びを実現するための方法学的研究

研究課題名(英文) Methodological research to realize proactive, interactive and deep learning by making use of Akita Prefecture's inquiry-type lessons

研究代表者

阿部 昇 (Abe, Noboru)

秋田大学・教育学研究科・特別教授

研究者番号：80323129

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：成29年・30年学習指導要領では「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業」が重視されている。しかし、その具体的実現のあり方については未解明の部分が多い。それに関し秋田県では探究型授業が以前から広く行われてきた。そこでは高度な対話的な学びがかなり実現されている。それは秋田県が全国学力・学習状況調査で好結果を続けている要因の一つでもある。

本研究では、秋田県の探究型授業の特長を教育方法学的に検討することで、主体的・対話的で深い学びの実現の方略を解明した。また、全国の教師と共同して方略案を生かした主体的・対話的で深い学びの授業を構築・実践し、方略を確かなものとする事ができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでのアクティブ・ラーニング研究では、一定の理論的解明は行われているものの、実現の具体的方略を示すまでには至っていなかった。実践の方略も、まだ未解明のままである。本研究では、秋田県の探究型授業の特長を再検討することを通して、主体的・対話的で深い学び実現の具体的方略を解明した。それにより「主体的・対話的で深い学び」でどのような学力を育てることができるかを解明した。また、その教育方法としての特徴を解明しつつ、どのような授業構築が有効かを教育方法学的に解明することができた。それ自体、教育方法学としての研究意義があるが、同時に全国の教師の新しい授業づくりにも大きな示唆を与えた。

研究成果の概要(英文)：The 29th and 30th year curriculum guidelines emphasize "classes for the realization of proactive, interactive and deep learning." However, there are many unclear points about how to realize it concretely. In connection with this, inquiry-type lessons have been widely held in Akita Prefecture for some time. There is considerable realization of highly interactive learning. That is one of the factors that Akita Prefecture continues to have good results in the national academic ability / learning situation survey.

In this study, by examining the characteristics of inquiry-type lessons in Akita Prefecture in terms of educational methods, we clarified the strategy for realizing proactive, interactive, and deep learning. In addition, I was able to establish and practice proactive, interactive, and deep learning lessons that make use of the strategy in collaboration with teachers nationwide.

研究分野：教育方法学

キーワード：主体的・対話的で深い学び アクティブ・ラーニング 探究型授業 見方・考え方 全国学力・学習状況調査

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

平成 29・30 年学習指導要領では「見方・考え方」を重視している。そのために「主体的・対話的で深い学び」という教育方法を推奨している。この「見方・考え方」は、OECD の PISA が重視する学力観とも深く関わる。

PISA を通して、日本の子どもは構造的読解力、批判的読解力、メタ的把握力、論理的表現力などが弱いことが判明した。それを克服するためにも「資質・能力」「見方・考え方」という観点での学力の見直しは必須であり、そのためにも「主体的・対話的で深い学び」の実現は重要である。これに深く関わるのは「アクティブ・ラーニング」の研究である。

溝上慎一(2014)はアクティブ・ラーニングについて「あらゆる能動的な学習のこと」「認知プロセスの外化を伴う」などと述べている。松下佳代(2015)は「他者と関わりながら、対象世界を深く学び」「知識や経験と結びつける」などとしている。主体的・対話的で深い学び、アクティブ・ラーニングに関わって注目すべきものに秋田県の「探究型授業」がある。秋田県では話し合い重視の授業が行われてきたが、全国学力・学習状況調査に伴い発足した秋田県検証改善委員会は、それを再検討し「探究型授業」と名づけた。課題 学び合い 振り返りの過程である(前頁表)。それが契機となり秋田県内で一層広く実践されるようになる。阿部昇は秋田県検証改善委員会委員長としてそれをリードしてきたが、それを整理する形で『アクティブ・ラーニングを生かした探究型の授業づくり』(2016)を上梓した。アクティブ・ラーニングを「課題について、異質な他者との対話・討論などの過程を通じて、内言の外言化を重視しつつ試行錯誤、評価・批判、推理・検証、発見・創造などの探究と振り返りを行う」「学びのあり方」と定義し、それにより育つ学力、探究過程の特長、教材研究・指導の要点等を示した。

## 2. 研究の目的

本研究では、秋田県の探究型授業の特長を教育方法的に検証することを通して、主体的・対話的で深い学び実現のための方略を解明することを目的とした。そのため、次を行うことを目指した。

(1)まず、「見方・考え方」にかかわる各教科の高次の教科内容を具体的に明らかにする。国語科では「言葉による見方・考え方」、算数・数学科では「数学的な見方・考え方」である。これは、授業における目標・ねらいにつながっていく。

(2)上記の高次の教科内容を育てるためには、どのような教材研究が必要となるかを解明する。

(3)上記(1)の教科内容を育てるためになぜ対話的な学びが有効なのかを解明する。講義型授業や問題型授業と対話的授業を比較検討しつつ、それらの差異と対話的授業の特長を探る。

(4)対話的な学び・対話的授業の授業を構築する際にどのような授業づくりを行えばよいのかを解明する。目標・ねらい 単元設計 授業の構造などについて解明する。また、授業における教師の適切な指導言(発問、助言、評価等)についても検討する。

(5)上記を通して、「見方・考え方」を確かに育てるための「主体的・対話的で深い学び」の授業の在り方を解明し試案を作成する。

## 3. 研究の方法

本研究では、秋田県の探究型授業を教育方法的に検証することを通して、主体的・対話的で深い学びの有効な実現方法について解明することを目指して。そのため、主体的・対話的で深い学びにかかわる先行研究・先行実践の検討 秋田県の探究型授業の記録収集と分析・検討

教師への聞き取り調査 秋田県及び全国の教師との主体的・対話的で深い学びのモデル授業の構築 上記 ~ を生かした「主体的・対話的で深い学び」実現の方法試案を作成する。

【平成 31 年度】先行研究・先行実践の検証、授業収集、聞き取り調査、授業の分析・検討

【平成 32 年度】授業収集継続、聞き取り調査継続、授業の分析・検討継続、試案作成開始

【平成 33 年度】共同研究によるモデル授業構築、主体的で深い学び構築試案完成

## 4. 研究成果

(1)秋田県の探究型授業およびそれに準ずる全国の対話的な学びの授業を分析・検討する中で、また、先行研究を検討する中で、対話的な授業によって育てることができる高次の教科内容の特長が見えてきた。これは学習指導要領の「見方・考え方」とほぼ重なる。たとえば国語科の読むこと指導の場合、表層の読みを深層の読みを高めていく際には、文章構造・作品構造に着目することが必須だが、対話的な学びを生かすことで、構造的な読みの方略を子どもたちに育てることができることを確認した。また、算数・数学科では、数式の意味理解や数式操作を超えて、数学的な考え方を外言によって説明することが重要だが、ここでも対話的な学びを生かすことでその方略を子どもたちに育てることができることを確認した。

特に対話的な学びの過程で、子どもたちが適切に外言化しつつ、質の高い話し合いや討論をしていくことが重要な意味をもっていることがわかってきた。

(2)上記にかかわり、教師自身の教材研究が大きな鍵となることも顕在化してきた。上記の国語科で構造的に読む方略を育てる前提として、まずは教師自身がその教材研究の中で具体的にどこまで文章や作品を構造的に分析・解釈できているかが大きな位置を占めることがわかった。算数・数学科の上記の授業で、数学的な考え方の外言化の方略を育てる前提として、教師自身が教材研究の際にどこまで外言化を豊かに行っているかが大きな位置を占めることも確認された。

そういった教材研究と授業の実際を、秋田県及び他の地域での授業づくりを分析・検討する中で確認することができた。その際に教師集団の共同研究が重要であることも見えてきた。

(3)「対話的な学び」を生かした授業づくりを展開するための授業構築の方策を解明した。対話的な学びには、内言の外言化の飛躍的な増加、多様な見方の交流、異質な見方の交換などの優位性が含まれていることがわかってきた。それが、上記(1)の高次の教科内容の保障につながる。

(4)上記(1)～(3)の解明を生かすかたちで「主体的・対話的で深い学び実現の方略試案」を完成した。その骨子となるのは、上記(3)をより発展させたかたちの「対話的な学びの教育方法としての優位性」である。それは、主に次の5つの項目からなる。

内言の外言化を飛躍的に促進

異質な他者との出会い

相互誘発・相互連鎖による思考の広がりと深まり

異質・多様な見方の収斂作用

異質な見方の討論による弁証法的止揚

第一は「内言の外言化を飛躍的に促進」についてである。私たちは内言と外言を駆使しつつ私たちは内言と外言を駆使しつつ考を展開している。外言は、私たちが普通に使っている話したり書いたりする際の言語である。それに対し内言は、自分一人で思考する際に使う言語である。日本語を第一言語とする者であれば、外言も内言も日本語によって成立している。内言は、たいへん速度が速い。外言を大きく省略し、短縮することによってその高速が実現している。一方で内言では、意識化が弱くなる。ヴィゴツキーは、内言を「自分のための言語」と言っているが、それは自分にとって有用であればよい。しかし、それを自分以外の人に話したり、文字に書いたりする場合には、内言はそのままでは外言として通じない。そこで、話す相手や読む対象にわかるように、省略されていた主語・述語は復活させ、自らにとっては自明の前提も柵から下ろし明示化する。もちろん短縮も元に戻す。さらに話す(書く)順番、文と文の関係、語句と語句の関係(概念と概念の関係)等を、構築し直さないといけない。つまりは思考の「再構築」が必要となる。

内言を他者に理解できる外言として再構築することは大人でも難しい。まして子どもにとって内言の外言化は容易ではない。授業中で手を挙げて発言しようとする、どう話していいかわからなくなるにはこのためである。内言の外言化は考えている以上に難しい。しかし、この難しい再構築の過程こそが子どもには重要である。友だちからの助言や教師の助言によって少しずつ内言に外言化ができるようになってくる。そして、その再構築の過程で子どもたちの思考が本物の思考になる。つまりはそれにより学びの質が上がっていく。思考・判断などを、誰かに話す、説明する、対話する、討論する、書くという内言の外言化の過程で、子どもは自らの学びを意識化できる。この過程は、話す際にも書く際に生じる。ただし、初めから「書く」ことによる外言化を求めることは子どもにはハードルが高い。まずは話す・対話することによる外言化からである。すべての子どもが授業中に発言し対話することは、この再構築過程の保障という意味で重要である。

対話的な学びでは、この外言化の機会が飛躍的に増える。特に少人数のグループを使うことでほぼすべての子どもたちが内言を外言化する機会を得ることになる。これは講義型、問答型、個別型の授業では十分に保障できない。対話的な学びでこそが保障できる。

第二は「異質な他者との出会い」である。対話的な学びには、異質な見方との

出会いというすばらしさがある。異質な他者との出会いでもある。多様で異質な見方に出会うことで、自分では気づかなかった見方を子どもは知る。様々な角度から対象を見ることもできる。異質な見方を生み出した方法を学ぶこともできる。そして異質性が強く反応することで、意外で新たな発見を生み出すこともある。この異質性も外言化が前提となる。断片的でも整理されたレベルでも、外言化があるからこそ対話が生まれ異質な意見・見方が顕在化する。

異質性にはさまざまな形、さまざまなレベルがある。

まず、グループなどで「自分はこう考える」を互いに出し合う段階である。互いに「そういう見方もあるか」と学んでいく。それ自体に意味がある。が、そこではまだ異質性相互が十分に絡み合っていない。それが、「なるほど、そういう見方もあるのか」「とても面白い見方だな」と互いを見方を承認し、良さを認め合うものに発展する。これは絡み合いの端緒である。「自分が自然と一体になっているから蝉の声がうるさくない」という友だちの意見から、「自然と一体」といった捉え方・見方を学ぶ。外言化としての表現の方法を学び、その価値を感じている段階である。次は異質性がさらに深く絡み合う段階である。異質な見解、解釈、根拠、理由、解き方、主張などの交わり合い・ぶつかり合いが重要な意味をもつ。それがこの後述べる討論につながる。異質性のさらなる発展である。

第三は「相互誘発・相互連鎖による思考の広がり」と深まり」である。集団による思考の良さは、異質な見方から学ぶだけではない。集団による思考は、一人での思考に比べ、複数の見方が構造的に組み合わせられ新たな見方を生み出す。ある見方が次の見方を誘発し、連鎖してまた別の見方を生み出す。ここには、模倣・類推・関係づけ・文脈化・総合などが含まれる。出された見方・意見が、直接に新しい見方・意見を誘発と、出された見方・意見を聞いて、その見方・意見の出すに至る方法や考え方を類推して誘発である。相互誘発型・相互連鎖型の思考の創造である。異質な見方が対立し相互に納得出来ない場合もある。その場合は「異質な見方の討論による弁証法的止揚」に進む。

第四は「異質・多様な見方の収斂作用」である。一人一人が意識しないで出した見方が構造的に組み合わせられ、共通性・一貫性が立ち上がってくる。また、具体的な検討が複数顕在化することで、それらに共通性が見てきて、その中で法則的な傾向や抽象的な概念が形成・発見されることもある。これは異質性と、その中から浮かび上がってくる共通性とが同時に立ち上がってくるかたちと言える。法則的な傾向からは、知識や方法く、新しい認識の仕方、新しいものの見方が浮き出てくる。

第五は「異質な見方の討論による弁証法的止揚」である。相互に納得できないと言うと、一見否定的に感じられるが、それは全く逆で相互に納得できない異質性こそが新しい見方や発見を生み出す。結果として一方が一方に納得するという場合であっても、結局相互に納得できないままであっても、その討論の過程そのものが創造的なのである。

討論が互いの中に試行錯誤を生み出す。相互批判を生かした推理・検証等によって、それまで見えていなかった発見が生まれる。また、相違し対立する見解を生かして討論を展開することで、自らの見解の問い直し、相手の見解の再吟味が必要となる。また、討論の中で曖昧であった点がクリアになってくる。今まで視野に入れていなかった部分に着目する必要も生まれてくることもある。新しいリサーチの必要性が見てくることもある。それらの過程で討論以前には、見えていなかった対象の新たな側面・新たな要素が見てくることもある。

物語・小説の構造上のクライマックスはどこかをめぐる討論でも、形象・技法の読みでどの解釈こそが重要であるかをめぐる討論でも、作品の評価をめぐる討論でも、新しい発見が

生まれる。説明的文章の論理関係をめぐる討論でも、文章の問題点を批判的に読み拓く討論でも、創造的な見方が生まれる。

こういった討論こそ対話の中でも特に創造性が高い。子どもたちが国語の授業で当たり前前に討論できる状況を創り出す必要がある。それも、子どもたちが討論を楽しみ、新しい見方が生まれたことを高く評価するという価値観を共有できるようにすることが大切である。それは丁寧で戦略的な教師の指導があってこそ可能となる。そして、この過程は教師集団による共同研究でもしばしば生まれる。まずは教師自身が、討論が新しい見方・より深い見方を生み出すことを経験として実感していくことが重要である。これは、人類の最も最先端の認識方法の一つである弁証法とつながる。「正・反・合」あるいは「定立・反定立・総合」を通した「矛盾の止揚」と説明されることが多い。それにより高次の思考が展開される。これは一度で終わらない。「合」「総合」はまた新たな「反」「反総合」を生み出すし、さらに高次の認識を見いだしていく。授業でもこれと似たことが起こる。特に対話的学びでそれが確かにより多く生まれる。弁証法的思考の創造である。これも講義型、問答型、個別型の授業では十分に実現できない。対話的な学びでこそ保障できるものである。

(5) 上記の成果を、論文及び書籍で発表した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 阿部 昇	4. 巻 19
2. 論文標題 国語の授業で「言葉による見方・考え方」を鍛えていくための方略 - 教科内容の具体的解明と「深い学び」の実現に留意しながら	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『国語授業の改革』	6. 最初と最後の頁 6-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部 昇	4. 巻 854
2. 論文標題 国語教育・授業キーワード「言葉による見方・考え方」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語教育（明治図書）	6. 最初と最後の頁 52 - 55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部 昇	4. 巻 18
2. 論文標題 作品の深層に分け入り言語能力を育てる古典教育へのコペルニクス的転回	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『研究紀要』（「読み」の授業研究会）	6. 最初と最後の頁 33-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部 昇	4. 巻 135
2. 論文標題 P I S A 「読解力」15位の要因を探る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『季刊理想』	6. 最初と最後の頁 9 - 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部 昇	4. 巻 20
2. 論文標題 「対話的な学び」こそが高次の言語能力を育てることができる - 教材研究力・目標設定力と「対話的な学び」の関係を探りつつ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『国語授業の改革』	6. 最初と最後の頁 6 - 21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 10件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 阿部 昇
2. 発表標題 「主体的・対話的で深い学び」を生かして確かな学力を保障する
3. 学会等名 富山県教育委員会2019学力向上研修会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿部 昇
2. 発表標題 学力向上を促す新聞活用の授業 - 「主体的・対話的で深い学び」「言語能力」に注目しながら
3. 学会等名 沖縄県N I Eフォーラム (沖縄県N I E推進協議会) (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿部 昇
2. 発表標題 「主体的・対話的で深い学び」を生かして確かな学力を保障する - 「見方・考え方」・探究型授業・共同研究システム
3. 学会等名 山梨県甲府市教育委員会講演会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿部 昇
2. 発表標題 組織的な授業改善のための共同研究の方略 - 「主体的・対話的で深い学び」を 創り出すための授業づくりと授業研究
3. 学会等名 山形県教育委員会・少人数学級編制等推進事業 教育マイスター推進事業（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿部 昇
2. 発表標題 秋田県の学力向上の取り組み - 探究型授業と共同研究システムの 特長を中心に
3. 学会等名 福島県西白川郡中島村教育委員会・学力向上推進研修会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿部 昇
2. 発表標題 国語の授業で対話的な学びを生かすための5つのポイント - 「ごんぎつね」「少年の日の思い出」「羅生門」を取り上げながら
3. 学会等名 「読み」の授業研究会・冬の研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿部 昇
2. 発表標題 探究型授業の必要性和 その展開方法
3. 学会等名 青森県上北郡六戸町教育委員会講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 阿部 昇
2. 発表標題 秋田の「探究型授業」が 生み出す深い学び - 中学校国語科の授業における 「見方・考え方」の形成をめざして
3. 学会等名 大阪府寝屋川市教育委員会・総合教育センター講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 阿部 昇
2. 発表標題 「主体的・対話的で深い学び」を生かし 「見方・考え方」を育てるための方略
3. 学会等名 青森県つがる市小学校・中学校教育研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 阿部 昇
2. 発表標題 質の高い探究型授業を 構築するための方法 指導方法と教材研究に着目して
3. 学会等名 福島県西白河郡中島村教育委員会講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 阿部 昇	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明治図書出版	5. 総ページ数 270
3. 書名 物語・小説の「読み」の授業のための教材研究 - 「言葉による見方・考え方」を鍛える教材の探究	

1. 著者名 阿部 昇	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明治図書出版	5. 総ページ数 311
3. 書名 増補改訂版・国語力をつける物語・小説の「読み」の授業 - 「言葉による見方・考え方」を鍛えるあたらしい授業の提案	

1. 著者名 田中耕治、阿部 昇、北 俊夫、富山哲也、山根俊喜、他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ぎょうせい	5. 総ページ数 162
3. 書名 学びを支える学習評価 - 理論・実践編 各教科等の学びと新しい評価	

1. 著者名 阿部 昇	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明治図書出版	5. 総ページ数 319
3. 書名 読解力を鍛える古典の「読み」の授業 - 徒然草・枕草子・平家物語・源氏物語を読み拓く	

1. 著者名 柴田義松・阿部 昇・鶴田清司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 228
3. 書名 あたらしい国語科指導法・六訂版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------